

## 論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 上野真弓

うつ病の症状には、抑うつ気分、意欲低下、易疲労感などとならび、焦燥感、希死念慮、自殺企図など、攻撃性に関連するものが挙げられている (APA, 2000)。「うつ病患者は常に自責的で他者攻撃をしない」わけではないが、うつ病・抑うつと攻撃性との関連についての先行研究は散見されるだけで (Friedman, 1970; 鈴木・安齋, 1999; Fava et al., 1991) 実証的な研究はほとんどされていない。この理由の 1 つは、うつ病と健常者の心理現象との連続性を考慮しなかったことにある。しかし、近年では、うつ病の症状は健常者の抑うつと、かなりの部分で連続すると考えられるようになった (坂本・大野, 2005)。そのため、健常者を対象とした非臨床アナログ研究が盛んに行われるようになり、成果を上げている。こうした研究手法の利点の 1 つは、比較的大きな標本を用いて複雑な統計的分析を行うことができる点である。本研究の最終的な目的は、従来の研究手法の問題を乗り越え、うつ病・抑うつと攻撃性との関連を明らかにし、有効な支援の方法を開発することである。

本研究は次の 7 つの調査研究から構成されている。なお、本研究における「抑うつ者」とは、健常者のなかで抑うつ尺度得点の高いグループをさす。また、本研究では、坂井・山崎 (2004) にならい、攻撃性を表出性攻撃と不表出性攻撃の 2 つに分けて検討している。なお、研究 1 は「パーソナリティ研究」誌上に公表済みである。

研究 1「抑うつと攻撃性 4 側面との相関」では、抑うつ尺度として SDS (Self-rating Depression Scale)、攻撃性尺度として BAQ (Bass-Perry Aggression Questionnaire) を用い、相関分析を行った。その結果、抑うつと表出性攻撃とは負の関連、不表出性攻撃とは正の関連があることが明らかになった。研究 2「抑うつと攻撃の表出傾向との関連」では、SDS と攻撃性尺度の STAXI (State-Trait Anger Expression Inventory) の重回帰分析から、抑うつと怒りの抑制には正の、怒りの制御には負の関連があり、怒りの表出とは関連しないことが明らかになった。つまり、研究 1 と 2 からわかることは、抑うつとは特に不表出性攻撃との関連が強いこと、抑うつ者は怒りを隠そうとする傾向が強いことである。

これらの結果から、攻撃性の認知的側面が抑うつと強く関連する可能性が考えられた。そのため、研究 3「抑うつと怒り表出信念との関連」では、抑うつ尺度として CES - D (the Center for Epidemiologic Studies Depression Scale)、怒りの表出に関する信念を測定する尺度として BASQ (the Belief of Anger Expression Style Questionnaire) を用いて重回帰分析を行った。その結果、怒りを抑制することに関する信念と抑うつとは関連が無かったが、怒りの表出に関するポジティブな信念、ネガティブな信念両方と抑うつは正の関連がみられた。そこで、研究 4「怒りの表出信念と表出傾向」では、抑うつの強さ、怒りの表出に関する信念、怒り表出傾向から構成されるモデルを作成し、CES - D、BASQ、STAXI の結果から探索的な共分散構造分析を行った。採用したモデルの適合度指数はいずれも高く、十分な適合度を有していると考えられた。このモデルからわかることは、抑うつ者が怒り

を感じた場合、(1)怒りを表出することは良いことだと考え、怒りを解消しようとし、(2)怒りを表出することは悪いことだと考え、怒りを他者に絶対に察知されないようにする、の2つのパターンが存在するということである。ただし、これらが個人によって違うのか、併存するのか、時期によって変化するのか、については今後の検討を必要とする。

次に、研究5「攻撃方法の分類」と研究6「抑うつ者の攻撃方法の検討」において、抑うつと攻撃性の行動的側面との関連を検討した。まず、大学生が強い怒りを感じたときに日常的にとる対処行動を調べるため、先行研究を参考にして「怒り喚起状況とその対処に関する質問紙」を作成した。因子分析によって「感情的表出因子」と「認知的不表出因子」の2つの因子を抽出した。この2因子と、CES-D、STAXIの相関分析を行ったところ、認知的不表出因子と抑うつ、怒りの抑制との間に有意な相関がみられた。つまり、抑うつ者は怒りを感じる際に、それを明らかな行動として表出せず、考え込む傾向がこの研究でも明らかにされた。

最後の研究7「抑うつサブタイプと攻撃性」では、身体症状・対人関係・ポジティブ感情・抑うつ感情というCES-Dの4つの下位尺度に基づいてクラスター分析と二要因分散分析を行い、「低うつ群(1群)」、「高うつ対人関係群(3群)」、「高うつ身体・抑うつ気分群(7群)」という3つのクラスターを抽出した。次に、攻撃性尺度であるBAQとMAQ(Müller Anger Coping Questionnaire)の得点をこの3クラスター間で比較した。その結果、1群は攻撃性が全体的に低いと言語的攻撃は高い、3群は怒りと敵意が高く言語的攻撃は低い、7群は怒りと敵意が高く身体的攻撃と言語的攻撃には差が無い、という特徴が明らかとなった。つまり、症状や抱える問題によって2群に分けられた抑うつ者は、いずれも怒りや敵意を抱きやすいが、攻撃性の表出に関してはそれぞれに特徴がある。この研究は、先行研究が抑うつ「量」のみ扱っていたことに対して、抑うつ「質」の分類に基づく分析を行っており、その結果は心理的支援方法にも有益な示唆を与えるものである。

本論文の審査会において指摘された修正点は次の2つに大別できる。(1)攻撃性等用語の概念を明確にすべきである、(2)生物学的な分析および考察を行うべきである。(1)については、攻撃性の分類を複数の先行研究に基づいて行ったことを明示した。ただし、攻撃性概念は研究によって異同があるため、本研究での定義を明確に記述するよう修正した。(2)については特に性差の問題を指摘された。本研究の結果には性差が見られる部分もあったが、先行研究の知見(たとえば、湯川(2008))では、男女間では攻撃の方法に差があっても、怒りの強さに差は無いと考えられている。また、抑うつについては、一般に女性の方が男性よりも重いといわれているが、7つの研究のうち1つの研究で同様の性差が見られただけであった。これらのことから、本研究の結果における攻撃性と抑うつには性差はないと判断し、論文中に明示した。加えて、序論および総合考察に、生物学的検討として、神経伝達物質や性ホルモンと攻撃性についての記述を加えた。

以上の点を修正した結果、東京大学大学院総合文化研究科における博士学位授与に相応しい論文内容として審査員全員によって認められた。